緑健文化草の根の旅 18

コミュナリズム 共同体運動とエコロジー

―第5回国際共同体研究大会に参加して

草刈善造

"コミュナリズム――その貢献と生き残り"

これはこの国際会議の共通大テーマであるが、かって共同体運動の一翼を担って世界的注目を浴びたソ連のコルホーズ、ソホーズ、中国の人民公社など、上からの強制的社会主義の崩壊と共に消失した。これに対して下からの民主社会主義運動としてのコミューン、ヒッピー共同体も米国、日本などにおいても泡沫のように消え去ってしまった。その中にあって、イエラエルのキブツ、北米（カナダも含む）のフッターライト、日本のヤマギシズム実顕地はか戦前からの共同体などは生き残っている。

しかし、人間と人間との協力、平和をめざすコミュナリズムの基底に人間と自然との協生、調和（健生）を求めざるをえないエコロジー的視座、環境問題の深刻化という人類史上初の難題の発生に直面し、今までの共同体運動の存在価値が、新しく問い直されることになったのは、至極当然のことでもあろう。すなわち、共同体運動は、今後の人類史的重大課題の解決にどのように貢献し、従って生き残って果すべきその役割は何なのか、が問われることになる。

日本協同体協会は早くからこの観点にたち、エコロジー的視角からキブツの実績と課題を論じた「キブツと未来」（日本訳は「キブツの挑戦」イスラエル・リング著、草刈ほか訳）を出版し、月刊「協同体」も「緑健文化」と改題してきたほどである。今回の第5回になるこの国際会議は、その意味で最も関心を唆られ、キブツ研修の旅をかねて参加できたことは幸いであった。第1回がイスラエルで開かれて以来2度目である。

参加国は70ヶ国、参加者数は約300人。テルアビブ郊外のラマトエファルのヤドタベンキンを会場に、5月30・31・6月1・2日の4日間。アジアからは韓国建国大学の孫泰根教授、中国社会科学院農村発展研究所の張晩山副所長と私ども日本人2人（渡辺勝義氏）合わせて4人だった。

一灯園の研究で滞日していたアビアム氏（「日本の共同体の継続性」を発表）や、名大大学院の女子留学生で山岸会の調査をしたインバルさん（「参加発展――日本のヤマギシズム」を発表）などにも、なつかしい出合いだった。感慨無量だったのは故Y・メッシンガー夫人ラッヘルさんとの再会だった。夫君と共に交通事故（夫君は即死）で九死に一生をえた夫人は後遺症（それでも大学でしばらく講義をしていたが）と老齢で、不自由な体をイスラエルの北方にあるキブツ・ラマトヨハナン（日本人グループがたびたび滞在した）から態々運んで、私の発表を聴講してくれたことである。発表文（後述）の中で私がしばしば引用する

国際会議後の「キブツめぐり」に参加の日本人グループ（会議場のヤドタベンキン図書館前、他国の参加者もみえる）

「健康な社会における健康な人格」という夫君の名句を夫人もきいてくれたことは何よりだった。

もう一つの喜びは、長い歴史と多くの共同体をもつフッターライツ（北米、カナダに散在）の人たちとの初めての出合いだった。かねてから視察を切望していたのだが、大会でついにそのチャンスが訪れたのである。二組の老夫妻ともう一人の女性が参加していたのである（下段の写真）。「生活共同体」というフッターライツの詳しい紹介書を寄贈してくれ、来年秋頃の訪問を歓迎すると大喜びであった。

大会議長Y．オベド教授（右から2人目）
キブツ・パルマヒムのメンバーでもある。

健康な協力的社会（新自然文明）をめざして

大会はABCDEFGHの8部会に分かれ、各部会はさらにそれぞれ5分科会に分かれ、全部で40の研究会となっている。各分科会のテーマを概観すると、教育、歴史、共同社会、キブツの問題点、共同社会の論争点、キブツの変化と危機、共同社会の歴史的経験、環境問題、キブツ文化と文学、理想と現実、社会福祉、協力協働、宗教的共同体、変化の方向、経済と経営、共同体的イデオロギー、家族、東欧の経験、教育と若い世代、共同社会の教育の再検討、コミューンの変化とキブツ運動、現代のコミューン、人間的体験など、広範な分野にわたっている。

この中で、特に注目させられるのは、キブツの危機、問題点、変貌などキブツメンバーからのキブツ自身のきびしい批判、現状報告、論評が34論文を占めていることである。一九六四年最初のキブツ留学当時からも、メンバー自身のきびしいキブツ批判（やがて滅びるかもしれぬという）を聞き馴れた者にとっては、この公開性、批判力こそがむしろキブツの自信と永続性を物語っていると思われる。日本の共同体、イデオロギー集団、宗教などのほとんどはこの公開、批判をさけて、無批判、自己顕示に終始し、遂にオウム真理教のようなドグマ盲信教団も発生する精神風土を培いがちであり、キブツと対照的でさえあるといえよう。

私自身はC部会の環境問題分科会に属し、ヤンバング氏の「環境的危機とキブツ運動」M・K・コワン氏の「21世紀への共同体運動とエコロジー的生存」についで「新自然文明と健康社会としての新しい共同体――社会学的視点からエコロジー的視座へ」と題して発表。その要旨（英文）を和訳すれば次のようになる。

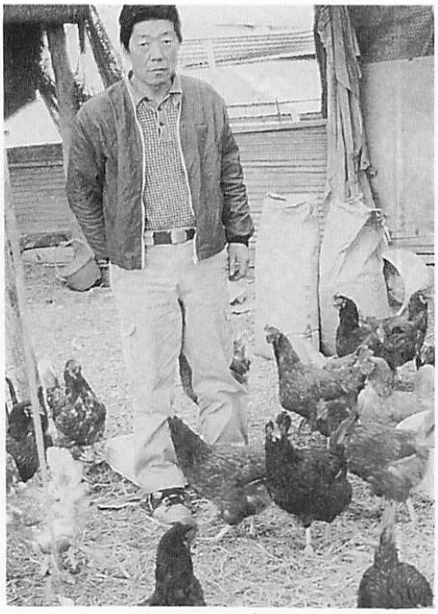
「釈迦、孔子、ソクラテス、イエスなどの古聖賢たちは、その時代の最大問題の解決に最善をつくした。すなわち、多くの人びと一人一人の人格、特に精神面の救済、助力に全力を捧げたのである。近代の聖なる社会（キブツその他の共同体）は、人間社会関係の最重要課題（自由、平等、相互協力など）の解決に社会的、集団的に大きく貢献してきたのである。しかしながら、20

フッターリアンブレズレン（ニューヨーク・コロニィ）の人たち
（大会場の食堂で）

夏場はもちろん無農薬のたくましい生命力にあふれる箱いっぱいの野菜が、毎週届き主婦たちを喜ばせる。

最近、物を金で買うという感覚が身についた消費者たちは、彼のいう「野菜に価格はつけたくない」に驚いた。「何を言っているのか理解できなかった。でも、美斎津さんの生き方、考え方を詳しく知るようになって、本当だと思いました。」と回顧する。「小諸市健康を守る会」萩原いさお会長は「美斎津さんの生き残りをかけた誠実な人がら、良心的なやり方で今までつづいたのでしょう」という。最近入会したばかりの加藤秀子さん（県内北佐久郡）は「身土不二の自然食を求めてですが、種類も多く月額一万一千円は安すぎるようです……距離は遠いが、直接畑に出かけてゆくほうが受取易いです」と。いづれにしても人柄に感銘し、きびしい消費者の目にも映る信頼感が、この共同方式を成立継続させているキーポイントのようである。

18種類以上に及ぶ多種類の自然栽培方式は30戸くらいが限界で、こうした協力の拡大普及もむずかしい。何よりも人間的信頼感の育まれる相互の意識の高さも不可欠である。氏は農の危機を訴えて月2～3回の農場通信も出し、意識の育成につとめているが、学校給食（中学2、小学6の8校）にも加わり、集会、研究会での啓発や、栄養士、調理師の自覚を求める。新しい共同体の発展を祈らずにはおれない。



土間に放し飼い自然養鶏
（この卵も協力家庭へ配る）

（8頁の五段目からつづく）

日本その他の国々のように経済物質優先の大量消費社会となるかもしれない。個々の競争も激しくなり、共有、共同生活のシステムを根底から揺がしかねないからである。キブツはこれにどう対処するのか。これはメンバー自身がキブツを根本的に否定することになりはしないか。この疑問に対して「今、私たちには経済的な豊かさが必要。そのためにいろいろなことを試みているが、これは私共の目標であり、キブツ哲学の実践でもある」と。これは今回の旅の中で最も印象に残ったあるメンバーの答えであった。理想社会というものは、実感できる幸福でなければならぬという彼らのメッセージと思えた。そして、ずばり、ここにキブツの原点が潜んでいるようにも感じられた。

キブツは、今また新しい闘いを始めたように思われる。それはこれまでキブツが経験してきたものとは大きく異なるものだろう。つまり、食べるためとか生きるためとか、他からの迫害から身を守るとかいった類の闘いではなく、キブツ構成メンバーの個々の生活の満足度を高めるための闘い、より高い生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）を求めての闘いである。これは実は私たち自身も追い求め続けているものである。だからこそ今回のキブツ訪問もした。

個々の物質的な豊かさを求めすぎたあまりに、大切な人間同士の絆を失ってしまった私たちと、素晴らしい社会システムを構築しえた後に、今新たに個人の幸福というものについて探し始めたキブツの人たち、この両者の出会いでもあった今回の旅は、限りなく興味深い課題を私に与えてくれた。

すべては変化し成長する。将来、もしキブツがこの人類共通の課題に答えを出し、なお現在のシステムを維持し続けることができたら、キブツは真の意味で理想社会といえるかもしれない。これまで人類が作りえなかった全く新しい形の社会モデルを自信を以て提供きるだろう。

「中東が理解できなければ世界は理解できぬ」とよく聞く。イスラエルは東西、南北文明の分岐点にある。この国には世界のすべての問題が、そのエッセンスが混在し、理想社会の原形も潜んでいるに違いない。その意味でもキブツはイスラエル一国のものではなく、世界の大きな財産かもしれない。"未来社会を想う"というとてつもなく興味深い旅に連れていって下さったことを心から感謝している。

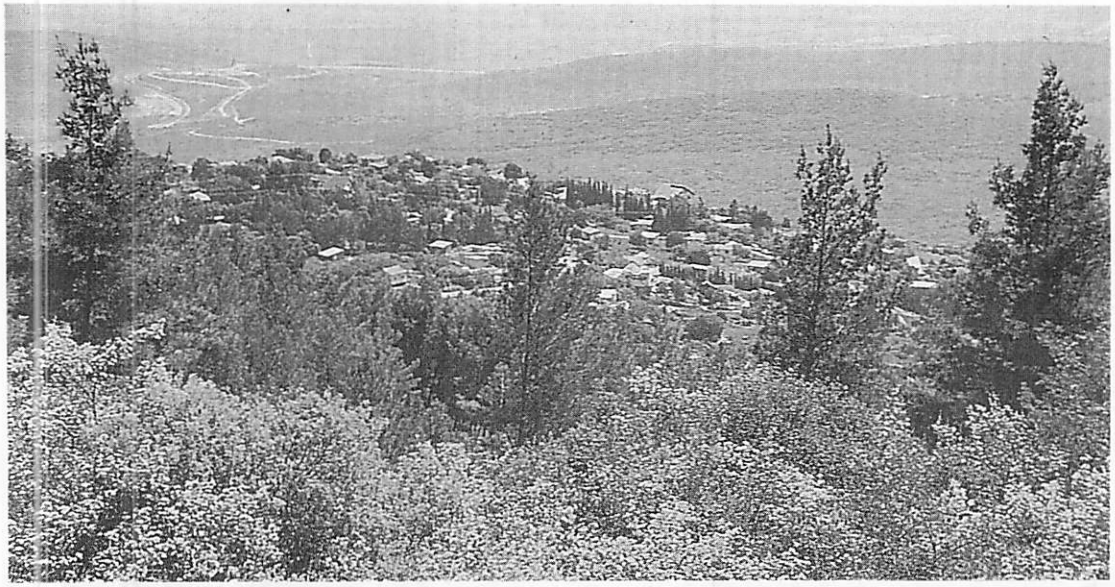
キブツ研修日記

（5・24～6・5）

都築　美津子

24／水　10時テルアビブ空港着、12時ニルダビド着
25／木　ユダの案内、博物館、動物公園見学、夜ミハル教授宅へ
26／金　アミハイ案内で魚池見学、午後三組に分かれ家庭訪問
27／土　キブツ・ベイトアルファ・フェフチバ訪問、午後キブツの歴史（ヨシュア講義－スライドつき）
28／日　デガニイ案内、キブツハルドフ、ハイファ、カルメル見学
29／月　ハイムの案内、果樹園見学、夜フリーダ宅へ
30／火　ニルダビット発、2人は国際学会参加、6人はキブツ・ゲゼル泊、イスラエル北方の各地、遺跡など観光
31／水
1／木
2／金　国際会議場で一行合流キブツめぐりの旅に参加、夕刻ゲゼルに帰泊
3／土
4／日　クムラン、死海、マサダなどの観光
5／月　エルサレム観光を終え、夜テルアビブ空港発、帰国へ

以上



新緑のガリラヤ湖畔

キブツ研修旅行団

(1995年5月23日～6月7日/15日間)

参加者（下の写真左から右へ）

1. 橋谷　史郎　鳥取社会福祉専門学校学生／倉吉市
2. 尾脇準一郎　国際文化研究所／鳥取県八頭郡
3. 浜路　叔子　鳥取社会福祉専門学校／倉吉市
4. 草刈　善造　緑健文化研究所／北海道阿寒郡
5. 渡辺　勝義　ホームチャーチ塾／浦和市
6. 宮城　正雄　全国報徳団体連絡協議会／静岡県小笠郡
7. 都築美津子　日本有機農業研究会／町田市
8. 橋本　宙八　PAS（マクロビアン発行）／いわき市

帰途、ソウル空港ロビーの美しい東洋山水画前で解団式